

會學濟經學大國帝都京

# 叢論濟經

號一第

卷四十二第

行發日一月一年六十正大

租税の目的と實體

教授 法學博士

神戶 正雄

再マルクスの社會的意識形態について

教授 法學博士

河上 肇

土地の非資本的性質に就て

教授 法學博士

河田 嗣郎

徳川時代の農民逃散

教授 經濟學士

黒 正 巖

經濟學の根柢をなすの公益的精神に就て

助教授 法學士

石川 興二

露西亞の産業組合運動

助教授 經濟學士

八木 芳之助

フイジオの勞賃論と「純收入」クライトの

講師 經濟學士

森 耕二郎

日支通商航海條約改正について

教授 法學博士

末 廣 重 雄

國庫預金制度と兌換券發行高との關係

助教授 法學士

汐 見 三 郎

武士階級の窮乏

教授 經濟學博士

本庄 榮治郎

家族統計概論

教授 法學博士

財 部 靜 治

海運勞務の提供に要する原費

教授 經濟學博士

小 島 昌 太 郎

琉球と慶長役

教授 法學博士

山 本 美 越 乃

## 經濟學の根柢をなす公益的精神に就いて

石川 興 二

眞の經濟學の根柢には公益的精神又は人道的精神と云はるべきものがなければならぬ。それが其經濟學の全體系を成立せしむる原動力である、そしてまた其經濟學全體系の目的である。アリストトルの語を借りて云ふならば、それは其全學的體系の *Causa efficiens* (動力因) であると共に *Causa finalis* (目的因) である。即ち此精神はその全學的體系の本體 (*Substance*) 又は生命をなすところのものである。故にその精神の如何は其學的體系の全體を支配することゝなるのである。かくてそれは經濟學成立の基礎的諸要件中の最も根本的なものである。

本論文の目的とするところは、此公益的精神なるものかゝる意義を、學史的、並に理論的に考察せんとすることである。

### 第一 學史的考察

偉大なる經濟學の根柢には常に偉大なる公益的精神があつた。即ち偉大なる經濟學の體系は確乎不拔の人道的精神の基礎の上に打ち立てられたものである。このことは偏見なく經濟學史を顧

る人々の等しく是認せねばならぬところであらう。

換言すれば經濟學史上の各偉人の經濟學的體系は、同一の公盛的精神の異なる歴史的事情に於ける現れであると思ふことが出来ると思ふ。例へばアダム・スミスとカール・マルクスとの經濟學的體系はそれ自身として全く相反するもの、様に見えるであらう。然しスミスの體系をそれが生れた十八世紀の其頃の英國の社會的事情並に彼の個人的事情に結びつけ、同様にまたマルクスの體系をその生れた十九世紀の其頃の社會的事情並に彼の個人的事情に結びつけて考へて見るならば、我々はこのことを承認せずには居れぬであらう。

誠に公益的精神は眞の經濟學者の傳統的精神であつて、各時代各國の經濟學者の取扱ふ問題と方法とは歴史的事情に應じて異なるも、只だ、この根本精神のみは一貫して變らないのである。否なその根本精神が變らなかつたからこそ異なる歴史的事情に應じて異なる學説が自ら生れ出たのである。例へば現代の經濟組織が生れんとする時に於けるスミスの學説に、その經濟組織が遙に進展した時に於けるマルクスの學説が同一であつたとするならば、マルクスの學説は、この人道的根本精神を充たすことは出来なかつたであらう。

斯くの如き考を有する自分は、茲に先づ、その最初の問題として、勝れた經濟學者ことに、スミスとマルクスとについて、その經濟學の根柢をなす公益的精神を鮮明せんとするのである。更に進んでかゝる公益的精神が異なる歴史的事情——社會的及個人的の——の下に於て如何に變化して現れたかと云ふ問題は、この問題が解れし後に於て考察することとして、本論の主眼とする。

ころではない。

### 其一 スミスの經濟學の根柢に於ける公益的精神について

スミスは、彼の心血を注いだ、不朽の大著に“An inquiry into the nature and causes of the Wealth of Nations.”なる題名を與へたのである。

凡そ大學者が、自己の生命の結晶とも云はるべき力作に與へたる題名の中には、その人の學の根本精神が凝結せしめられてゐるのである。故に我々は先づこの中に含蓄せしめらるゝ深遠なものを味はねばならぬ。ここにその Wealth of Nation を云へることに注意を向けねばならぬ。

彼はこの the nature of the Wealth of Nation について、其著の卷頭に於て説明を與へてゐる。

“The annual labour of every nation is the fund which originally supplies it with all the necessaries and conveniences of life which it annually consumes, and which consist always either in the immediate produce of that labour, or in what is purchased with that produce from other nations.”

先づ此富とは勞働の直接間接の生産物である。彼は重商主義及重農主義とは異り勞働、一般を重じたのである。ここに從來の經濟學者と異り生産的勞働の犠牲を重ずる彼の精神が現ははれてゐる。それは後に來るべきマルクスに於けると同様なる人道的精神の現はれである。

次にその Wealth は國民が年々消費する the necessaries and conveniences of life である、即ち彼は富を富として問題とするのでなく生活の手段として問題とするのである。而してこの生活 (life) は單なる物的生活を意味するものでなく精神生活をも意味することは道徳哲學者たるスミ

1) Adam Smith. Wealth of Nations. edit. by Cannan I. p. 5.

スにとつては當然のこと云へよう。然らば、*Musius*が *Wealth* と云へるは人の人たる生活の手  
段としての必需品及便宜品である。

次にその富の主體たる "Nation" と云へるは "all the necessaries and conveniences of life which  
it annually consumes," と云へる、<sup>1)</sup>より見て、また以上の句に續いて "According therefore, as this  
produce, or what is purchased with it, bears a greater or smaller proportion to the number of those who are to  
consume it, the nation will be better or worse supplied with all the necessaries and conveniences for which it has  
occasion." と云へるにより、其社會の全員を意味することは知り得るであらう。*Musius*の研究者と  
して有名なキヤナンも By a nation..... he (Adam Smith) understood a number of individuals who.....con-  
stitute the whole population of a given territory under one government. とした。<sup>2)</sup> 即ち彼の *Wealth of Nation* と  
云へるは只一國家又は社會に存在する富の絶對量としてのキヤナンの所謂 *Aggregate Wealth* と  
く、其社會の全員數との關係に於て考へられたる即ちキヤナンの所謂 *average wealth* であり、社  
會の全員の生活に即して考へられたものである。<sup>3)</sup> このことは "consumption is the sole end and  
purpose of all production;" と云へる、<sup>4)</sup> によつても明になると思ふ。

彼は *Wealth of Nation* なる概念を、一方生産的勞働に即せしめ、他方全國民の消費と云ふこ  
とに即せしめて考へた、従つて the causes of the wealth of nation を論ずべき本論に於ても一  
國の生産的勞働の負擔者であり而も富の最も惠まれざる、下層階級について考へることを忘れな  
かつた。

1) Cannan; Theories. p. 10

2) Ibid. p. 11

3) *Wealth of Nations* II p. 159.

4) 富の概念に就ては、拙稿「キヤナンの富の概念に就きて」(本誌第十卷第一號  
及び第三號)参照。

普通 aggregate wealth 又は生産力の問題として考へらるゝ生産論の問題に於ても尙ほこれ等下層階級の生活状態を問題としてゐる。先づ分業論に於て、It is the great multiplication of the production of all the different arts, in consequence of the division of labour, which occasions, in a well-governed society, that universal opulence which extends itself to the lowest ranks of the people..... a general plenty diffuses itself through all the different ranks of society..... it may be true, perhaps, that the accommodation of an European prince does not always so much exceed that of an industrious and frugal peasant, as the accommodation of the latter exceeds that of many a African king, the absolute master of the lives and liberty of ten thousand naked savages.”として分業が生産力の増大と共に其社會の最下層民 (the lowest ranks of the people) に至るまでの生活を高めしことを讚美してゐるのである。

また第二篇の資本論に於ても、それは多くの生産論に於けると異なり、下層階級勞働者階級の生活との關係に於て考へられてゐる。即ち “the different quantities of labour which it (capital stock) puts into motion, according to the different ways in which it is employed.” を論ずることを其第五章の目的としてゐる。

即ちこれ等の點は普通の生産論に見られぬ點であつて、Wealth of Nation の考に於けると同じく、スミスの經濟學の根柢に躍動せる公益的精神の顯現として考へることが出来るであらう。また分業論第二章に於ける次の語は、今日社會問題を念頭に置けるものにとつては痛切なる感があるであらう。

1) Wealth of Nations I, p. 12.

2) Ibid. I, p. 340.

“The different of natural talents in different men is, in reality, much less than we are aware of; and the very different genius which appears to distinguish men of different professions, when grown up to maturity, is not upon many occasions so much the cause, as the effect of the division of labour. The difference between the most dissimilar characters, between a philosopher and a common street porter, for example, seems to arise not so much from nature, as from habit, custom, and education.”<sup>1)</sup>

今日の社會に於て自由職業と云はるゝ比較的有利なる精神的勞働にあるものにして工場の際にまみれる一筋肉勞働者に自己を對比せしめ、スミスのこの言を全く否定し得るものが果してあるであらうか。

かくの如くスミスの經濟學の根柢に躍動せる公益的精神は彼の著書の種々なるところにて何ふことを得るが、其特に顯著に現ははれてゐるのは重商主義論に於てあると考へるが故に、以下直に其點に論及したいと思ふ。

彼は第五篇第一章に於て重商主義の諸原理を説明し、第二章以下其批判に入らんとして次の如くに問題を提出してゐる。

“I shall consider each of them in a particular chapter, and without taking much further notice of their supposed tendency to bring money into the country. I shall examine chiefly what are likely to be the effects of each of them upon the annual produce of its industry. According as they tend either to increase or diminish the value of this annual produce, they must evidently tend either to increase or diminish the real wealth and revenue of the country.”<sup>2)</sup>

1) Ibid. p. 17.  
2) Ibid. p. 417.

こゝに注意せねばならぬことは、重商主義の諸原論が貨幣を一國に齊らすことを以つて目的としたものであると彼が考へる以上、これ等諸原論を批判するに當つては、この觀點よりすると云ふことが當然と考へらるべきに拘らず、敢て其觀點よりせざることを明言して、特に「一國の眞の富及收入」に對する影響と云ふ觀點よりこれをせんとすることである。この際同一の對象に對して一の觀點よりの問題を取らずして、他の觀點よりの問題を取るべしとする所以のものを決するところのものは何であるか。それはスミスの經濟學の根柢に働ける公益的精神に外ならないのである。スミスの重商主義批判が強き公益的精神の發露として人類の歴史の進展に對する重大なる力となり、偉大なる功獻をなし得た所以の本はそもこゝにあるのである。若し彼がこの重商主義の諸原論をそれが本來目的としたと考へし「貨幣の獲得」と云ふ觀點より批判したとするならば、彼の學問的功績は到底かくの如く大なることを得なかつたであらう。單に「學の爲めの學」と云ふことを主張する人々はかゝる問題に對して答へることが出來ないであらう。

私はさきに偉大なる經濟學は總て同一なる公益的精神の異なる歴史的事情に於ける發現であること述べたが、今彼の重商主義批判論につき、其根本をなす精神を明ならしめんとせば、當時の歴史的事情を知りこれに結んで考へなければならぬのである。

スミス自身が云へるが如く、當時は尙重商主義が行はれていたのである。即ち強制的規制の中世より近世の經濟的自由への過渡時代として、貿易も政府の干渉の下に立つて、多くの種類の貨物の輸入は或に絶對的に禁せられまたは高き關稅を課せられ、従つてそれ等貨物の生産者達の國

内市場に對する獨占は夥しい有様にあつた。

**獨占の弊害。**其結果たる弊害は、生産上及分配上に及んだ。生産上に於ては、此獨占は國際分業を妨ぐるることによつて社會の生産力を減少せしめた。

分配又は消費の上に於ては此獨占の結果、其等貨物の價格は當然に騰貴して國內の一般消費者は犠牲を拂ふことを餘儀なくせられ、而もこの一般消費の犠牲により生産者就中商工業者は大いに其利益を受けたのである。

彼はこのことの不當を攻めて次の如くに云ふている。

“Consumption is the sole end and purpose of all production; and the interest of the producer ought to be attended to, only so far as it may be necessary for promoting that of the consumer. The maxim is so perfectly self-evident, that it would be absurd to attempt to prove it. But in the mercantile system, the interest of the consumer is almost constantly sacrificed to that of the producer; and it seems to consider production, and not consumption, as the ultimate end and object of all industry and commerce.”<sup>1)</sup>

即ち經濟的活動の窮局の目的は社會一部の企業者階級の私益を増進することにあらずして、社會全員たる消費者の利益即ち公益を増進するにありとなし、私益の爲に公益を獨占せる此等企业者階級を非難してゐるのである。而して彼はこの私益の爲めに公益を獨占して恥ぢざるの卑劣、破廉恥を痛罵して“the wretched spirit of monopoly”<sup>2)</sup>と呼んでゐる。そしてまた農業者階級にかゝる獨占心の少きことについて「彼等にとつて甚だ名譽なきこと(to their great honour)」<sup>3)</sup>など云ふてい

1) Ibid. II p. 159.

2) Ibid. I. p. 426.

る。スミスがかゝる社會的破廉恥の態度に對し如何に公憤を禁する能はなかつたかを知るべきである。

**獨占打破の主張。**而して彼はかゝる事情の下に於てこの獨占的弊害の救濟策として、府政の企業階級に對する保護干渉を排し個人の經濟的自由を高調しこれをもつて社會の生産力の増大及分配の公平に適するものとした。こゝに一言注意すべきは、かくてスミスは self-interest の自由放任を主張したが、それはこれをもつて理想的なるものと考へたが故でなく、これに伴ふ種々なる弊害あることを認めながらも、而も當時の事情よりして、政府の如何なる善意の干渉も、これに比して公益の爲めに不可なることを認めたが故である。<sup>1)</sup>

**獨占打破の困難と之に對する彼の人道的勇氣。**而も彼はその獨占打破を困難ならしむるところの彼等獨占者の社會的強力について次の如くに述べている。

“This monopoly has so much increased the number of some particular tribes of them, that, like a overgrown standing army, they have become formidable to the government, and upon many occasions intimidate the legislature.”

かくも有力なる社會階級の私的利益に對して戦ふ時、自己の生命の危険をも賭せざる可らざることを彼は明に意識していた、而も彼は社會公益の爲めに斯くも勇敢に其戦を宣したのである。この句につゞく次の句には彼の人道的勇士としての姿が躍如としている。

“The member of parliament who supports every proposal strengthening this monopoly, is sure to acquire not only the reputation of understanding trade, but great popularity and influence with an order of men whose numbers and

1) It Arfred Marshall. principles. 7ed. 758. 參照。

2) Wealth of Nations. I p. 435.

wealth render them of great importance. If he opposes them, on the contrary, and still more if he has authority enough to be able to thwart them, neither the most acknowledged probity, nor the highest rank, nor the greatest public services, can protect him from the most infamous abuse and detraction, from personal insults, nor sometimes from real danger, arising from the insolent outrage of furious and disappointed monopolists."

この徹底せるスミスの人道的熱情は我等經濟學者を深く反省せしめずには置かないであろう。而もこれに引き續く句に於て彼は獨占排棄に當りて、彼が公益の敵として戰ふた彼等獨占者の受くべき運命に就ても亦人道的に考慮することを忘れなかつた。

我々は彼に於て、經濟學者たるの根本要件たる人道的精神の典型を見るのである。

"The undertaker of a great manufacture, who, by the home markets being suddenly laid open to the competition of foreigners, should be obliged to abandon his trade, would no doubt suffer very considerably. . . . The equitable regard, therefore, to his interest requires that change of this kind should never be introduced suddenly, but slowly, gradually, and after a very long warning."

即ち彼等も亦社會の成員である以上其運命に對しても尙ほ正義的考慮 (the equitable regard) を要求せるはスミスの公益的精神の徹底せる所以である。

彼は更に進んで立法者が階級的利益の喧しを強請 (the clamorous importunity of partial interests) に動かさるゝことなく、公益の廣き觀點 (an extensive view of the general good) に立つて、以て獨占の新設擴張並に廢止に必ず伴ふところの社會の騷亂を未然に防ぐべきことを要求しているのである。

1) Ibid. I p. 436.

以上、私はスミスの經濟學の根柢を「諸國民の富」について探つたのであるが、我々はかくてそこに、經濟學者にとつて典型的なる公益的精神を見出したのである。

スミスに創まつた個人主義派經濟學の流に立つて、十九世紀の前半を代表すべきシェー・エス・ミル及び十九世紀の終より二十世紀の初を代表するマーシャル等についても、同様の考察をなすことは意味あることであろう。前者については、その經濟原論中の *stational state* 論 *The future of the labouring class* 論等に於て、ことに明にその根柢となれる公益的精神を見ることが出来ると思ふ。後者については其三部作の全體を通じてこれを見得ると思ふ。然しマーシャルに就ては既にこの問題に觸れたこともあり、またこれ等の人はスミスと同じ流に屬する人であるから、この制限されたる論文に於て取扱ふことを止め、寧ろ、これと反對の立場に立ち、而もスミスにも比すべき大ききを有するマルクスについてこの考察を向けて見たいと思ふ。

## 其二 マルクス經濟學と公益的精神。

マルクス經濟學の根柢に目的の意志があるかどうかと云ふこと自體既に多くの異論のあることであらう。私はこの短い論文に於てこの問題を論じ盡し得ようとは思はない。然し少くとも、この問題に對し否定的に答ふることを不可能なることを示めたいと思ふ。

彼の *“Die Thesen über Feuerbach.”* を見るならば、彼の哲學的見解の特徴は寧ろ思惟と實踐とを相離る可らざるものとし、従つて學の目的は實踐にありとすることが明である。例へば *“Denken, das von der Praxis isoliert ist.”* (實踐から遊離してゐる思惟) を非難した。 *“Die Philosophen haben die Welt nur verschieden interpretiert; es kommt darauf an, sie zu verändern.”* (哲學者は世界をいふ／＼に解釋してきたゞけである。だが肝要なることは、世界を變更することであ

- 1) 社會科學、マーシャル號(大正十五年一月)抽稿、「晩年のマーシャル先生を訪れし頃の思ひ出」
- 2) Marx-Engels Archiv. I Band S. 227.
- 3) Ibid. S. 230.

る)云ふてゐる。

然らば Verändern と云ふことは、一體どう云ふことであるか。それは必然との結合である云へよう。マルクスが尊崇したアリストートルは物の生成 (come to be) を論じて自然によるものを natural becoming とし人為によるものを making とした。Verändern と云ふことは人為によることである故に後者に属することは明である。そしてアリストートルは後者の性質を説明し、その目的と必然との結合にあることを明にしてゐる。彼は醫師が病人を醫する例を用ひて曰く、醫師が病者を健康ならしめんと欲せば、先づ健康と云はるべき身體の状態の何なるかを知らねばならぬ。それが uniform state であるとするならば、この状態があると云ふことは何に depend on かを知らねばならぬ。これが病者の being made warm と云ふことに depend on することを知つたならば更にこのことが何に depend on するかを知らねばならぬ、かくして彼は a final step which he can take へまで思索を進めて行かねばならぬ。これが thinking の道行である。温かくすることを云ふことが摩擦すると云ふことに depend on してゐることを知つたならば、この摩擦すると云ふことは a final step which he can take である。即ちそれは present potentially なものである。かく健康と云ふ目的より出で、可能な (potencial) な最後の手段にまで depend on する必然的の系列を求めて行くことが、"thinking" の道行である。次にこの最後の可能的なる手段を實現せしむれば——此際醫師が摩擦することによつて病者を温むれば——必然の系列は次へ次へと必然に實現され遂に目的とされたる健康の實現にまで至るのである。これは "making" の道程である。

かくて彼は “Therefore it follows that in a sense health comes from health and house from house, that with matter from that without matter;” 即ち或意味で健康から健康が、家から家が成る、素材を持たぬ其ものから素材を有つた其ものが成ると云ふことになる。即ち Form without matter から Form with matter が出来るのである。前者はこの全體の必然の系列を成立せしむる原動力でありこの全體の系列の目的となるものである。(本論文の冒頭に動力因即ち目的因であると云ふたのはこの意味である)そして後者は此目的の現實せられたものである。斯くて making の本質は目的と必然との結合であると云ふことが出来よう。従つてマルクスの Verändern と云へることについても同様である。

マルクスの經濟學即大著「資本論」は dialektische Entwicklung と呼ばるゝ必然的發展の形を示めしてゐる。然しマルクスの云へるが如く學の意義は Verändern にありとするならばこの必然の系列に結びつけらるべき目的がなくてはならぬ、そしてこれはまたこの必然の系列を成立たしむる原動力となるものでなければならぬ。

マルクスのこの必然の系列は、アリストートルの所謂 thinking の行程の後に於てこの順序を逆にして記述したものであることは、彼自身が “Die Methode der politischen Ökonomie” の初めに論せることより察せらるゝと思ふ。然りとせば資本論に於ける必然的發展の系列は、アリストートルの所謂 making の順列に相當するものである。

若し然りとせば、アリストートルの making の必然の系列の最後に其全體の目的たる health が

1) Marx: Zur Kritik der politischen Ökonomie, Einleitung XXXV 以下。

あるが如くマルクスの必然の系列の窮局に於てもこの必然的發展の系列が到達すべき窮局の目的がなければならぬ。

然るに恰も「Das Kapital」の最後の章に於て、彼が資本論全體に取扱ひし經濟的發展の最後の到達點と考へらるべき「自由の王國」が述べられているのである。然らばこれが彼の資本論全體の根底にある目的因であり、またその全體を成立せしむべき原動力でなくてはならぬ。

かく解することによつて、さきに舉げしマルクスの語が矛盾なく解し得るのみならず、また次のエンゲルスの語がかく解することを裏付ける様に思はれる。

即ち彼が學の目的とするところの「世界をVerändernする」云ふは、「一の自由(Freiheit)である。そのFreiheitについて彼の協力者エンゲルスは、「Nicht in der geträumten Unehängigkeit von den Naturgesetz liegt die Freiheit, sondern in der Erkenntnis dieser Gesetze, und in der damit gegebenen Möglichkeit, sie planmäßig zu bestimmten Zwecken wirken lassen」<sup>1)</sup>即ち自由とは、法則を認識することによつて與へらるゝところの特定の目的に向ふて法則を計畫的に働かしむる可能性に存すると云ふてゐるが、これはベーコンが自然に服従することによつてのみ自然を征服すると云ふたこと、同一の精神である。彼の經濟學にとつてこの特定の目的をなすところのものは、「自由の王國」であり、そして資本論全體はこの「自由の王國」に向ふて、彼が発見した諸法則を計畫的に働かしめてゐるものと考へ得るであらう。即ち彼の「資本論」は彼等の所謂自由の體系そのものである。

然らば彼の經濟學の根柢をなすその目的、動力的ものゝ性質は如何なるものであるか。それ

1) Engels. Umwälzung der Wissenschaft. S. 112.

は彼の「自由の王國」の敘述を見ればよい。

„Das Reich der Freiheit beginnt in der Tat erst da, wo das Arbeiten, das durch Not und äussere Zweckmässigkeit bestimmt ist, aufhört; es liegt also der Natur des Sache nach jenseits der Spähre der eigentlichen materiellen Produktion. Wie der Wilde mit der Natur ringen muss, um seine Bedürfnisse zu befriedigen, um sein Leben zu erhalten und zu reproduzieren, so muss es der Zivilisierte, und er muss es in allen Gesellschaftsformen und unter allen möglichen Produktionsweisen. Mit seiner Entwicklung erweitert sich dies Reich der Naturnotwendigkeit, weil die Bedürfnisse, aber zugleich erweitern sich Produktivkräfte, die diese befriedigen. Die Freiheit in diesem Gebiet kann nur darin bestehen, dass der vergesellschaftete Mensch, die assoziierten Produzenten, diesen ihren Stoffwechsel mit der Natur rational regeln, unter ihre gemeinschaftliche Kontrolle bringen, statt von ihm als von einer blinden Macht beherrscht zu werden; ihn mit dem geringsten Kraftaufwand und unter den, ihrer menschlichen Natur würdigsten und adäquatesten Bedingungen vollziehen. Aber es bleibt dies immer ein Reich der Notwendigkeit. Jenseits desselben beginnt die menschliche Kraftentwicklung; die sich als Selbstzweck gilt, das wahre Reich der Freiheit, das aber nur auf einem Reich der Notwendigkeit als seiner Basis aufbauen kann. Die Verkürzung des Arbeitstags ist die Grundbedingung.“<sup>1)</sup>

今その大意をかいつまんで云ふならば、人間の物質的生産生活と云ふものは、本質上他律的なものであるから自由の王國と云ふものは、この彼岸にあるものである。而も人間が社會的に相結合して自然に當たり、其生産的活動を、合理的に規制し、共同的管理の下に置き、最小の力の支出により、人間性に最も相應はしき最も適當した條件の下に行ふと云ふことによつて、この物質

1) Karl Marx. Das Kapital. Heraus. von Engels III (2) S. 355.

的生産生活をも相對的に自由化することが出来る。而もそれはやはり必然の國である。此必然の國の彼岸に、それ自身目的とされる所の人間の精神的諸能力の發展が始まる、それが自由の王國である。然しこの自由の王國は、合理化された必然の國の基礎の上のみ榮えることが出来るものである。物質的生産生活を合理化することによつて、この手段的生活に用ふる爲めの時間を出るだけ少くし、それ自身目的である文化生活に出来るだけ精力を集中することが第一である。かくて彼の所謂「自由の王國」なるものは、眞の公益的精神の徹底せるものであり、即ち經濟的理想の實現されたところのものとなるのである。

即ち、彼の經濟學なるものは、この「自由の王國」の實現を其根本的の目的としているものであり、従つてその根底には徹底せる公益的精神が躍動してゐるのである。

換言すれば彼の所謂社會的生活過程が敵對的形態を取り、相團結して合理的に自然に向ふべき人間が、互に相争ふことによつて、人類が眞の人間生活を營み得ざるところの資本家的生産方法と云ふ最後の不合理なる社會構成を打破して以て人類社會の前史を終へ、自由の王國に於て人類社會の眞の歴史に入らんとする、科學的努力の結晶が即ち彼の經濟學なのである。

かくてマルクスは、現に多くの人々により誤らるゝが如き、運命論者又は唯物論者に非ずして寧ろ之とは反對に、資本家的生産社會の法則を把握し、これに従ふことによつて彼が不合理とせる社會を打破し、人類の眞の理想を實現せんとした、徹底的な理想主義者なのである。

ミスが國家的干渉より生せる公益の獨占を打破せんが爲に、要求した自由放任の經濟社會は

其自由放任の結果有産者階級と無産者階級との分裂は増大し公益は再び有限産者階級に獨占さることゝなつた。これに直面せしマルクスは自由放任の結果生ぜし公益の獨占を打破せんが爲に社會の干渉を要求したのである。故にスミスがマルクスの時代に生れたならばマルクスと同じく社會的の干渉を要求したであろう。マルクスがスミスの時代に生れたならばスミスと同じく自由放任を求めたであろう。マルクスの干渉は眞の自由の國へ至る爲の干渉であつた様に、スミスの自由は單なる自由放任ではなく、"allowing every man to pursue his own interest his own way, upon the liberal plan of equality, liberty and justice."である。兩者にとつて重要なことは其眞目的たる社會的正義の實現にあつたのである。所謂主義はこの目的實現の爲の手段であり、公益的精神に従たるものであつたのである。今日多くの經濟學研究者の間に見らるゝが如く、この眞目的を忘れて手段の争闘をことゝするならばそれは學社の精神に背くものである。

## 第一理論的考察

以上の學史的考察に於て、私は、公益的精神が勝れたる經濟學の根柢をなしてゐる事實を明にしたから、進んで理論的考察に移つて、何故に公益的精神が經濟學の根柢をなさねばならぬかと云ふ理由を明にしたいと思ふ。問題は sein より sollen に移るのである。

そして、先づ生の要求が學の根柢になければならないと云ふことを、次にそれが公益的精神でなければならぬと云ふことを論じて見よう。

學の根柢に生の要求のあることを要するや否やについて二種の主なる考へを見る。一つは所謂「學の爲めの學」(Wissenschaft um der Wissenschaft willen)と云ふ考であり、他は「生の爲めの學」(Wissenschaft um des Lebens willen)と云ふ考へである。即ち前者はこれを不要とし、後者はこれを要するものである。私はこの二つの考へを經濟學を中心として考へて見よう。

學は人の文化的生命を成す geistige Akte (精神的清行爲)の一種 Erkenntnisakt (認識行爲)の所産でありまたこれを満足せしむるところのものであり、他種の文化財又は文化域 (Kultur Gebiete)と同じくそれ自身獨特の存在の意義を有するところのものである。故に「學の爲めの學」と云ふ要求即ち學と云ふ獨特の生を満足すべきをそれ自身の要求を否定することは出来ない。

乍然「學」が只だその一面をなすところの文化的生命全體より見るならば、問題はこれのみにて盡き得ない。即ち諸種の文化域が相寄つて全體の文化的生命を成してゐるのであるから各文化域はそれ自身獨特なる存在の意義を有すると共にまた全體との關係に立たねばならぬ。(この關係全體の問題はこゝに論ずべき限りでないから、今は只だ「學」と云ふ文化域と全體的生命との關係を考へば足るのである。)この關係より考へるならば、學はそれ自身獨特の生であると共にまた全體の生に對する手段の關係に立つ。こゝに於て學の意義の二面性と云ふことを考へなければならぬ。そして後の意義即ち學の生全體に對する存在の意義は前の意義即ち學それ自身獨立の存在の意義を規制すべきである。それは恰も分業に於ける協力的全體と其部分としての各分業との如き關係である。かくて「學の爲めの學」と云ふ考よりも、「生の爲めの學」と云ふ考が主とならなければ

ならない。斯くて經濟學の最後の根柢をなす精神は「生の爲め」と云ふ精神でなくてはならない。換言せば生の要求でなければならぬ。今日の哲學に於て二大潮流を成すところの Wissenschaftsphilosophie (學の哲學) と Lebensphilosophie (生の哲學) とはこの二つの主張の對立を表らばすところのものであるが、後者が益々優勢となり前者に代つて哲學の主潮をなしつつあることは注意すべき現象である。そしてこの問題に關する生の哲學者達の主張の要點は次の語によつて表はされ得ると思ふ。

‘Und doch ist allen ihren (=Lebensphilosophen) Vertretern gemein, dass sie neben der Wissenschaft auch ein ausserwissenschaftliches Leben als Gegenstand der Philosophie anerkennen, dass ihr Ziel nicht Wissenschaft um der Wissenschaft willen ist, sondern dass sie auch die Erkenntnis in den Dienst des Lebens stellen, und dass ihnen daher hinter dem Problem des Erkennens das des Lebens als Zentralproblem der Philosophie aufgeht.’<sup>1)</sup>

上述せしところによつて經濟學の根柢に生の要求がなければならぬと云ふことは明になつたと思ふが更に進んでこの「生」そのものが如何なる性質のものでなければならぬかを考へて見よう。

「生の爲めの學」と云ふ主張は昔て米國を中心として興つたところの所謂 Pragmatism. (實際主義)によつても唱へられたところのものである。然しその「生」の意味するところは主として生物的個人的生命の要求であつた。かゝる意味に於て「生の爲めの學」と云ふことの無意味なることは云ふまでもなからう。

即ち先づ、個人々々の生物的生命の要求と云ふ様なことは人類共同の文化的活動たる經濟學の

1) R.Müller-Freienfels. Die Philosophie des Zwanzigsten Jahrhunderts. S.

目的とするだけの價値のないことである。次に個人々々の生物的生命の要求と云ふ様なことは各人に於てまちまちであり何等客觀的妥當性のないものである。従つてかゝる「生」の要求を根柢とする經濟學は何等客觀的妥當性を有することが出来ない。

依て經濟學の根柢たるべき「生の要求」は、先づ精神的生命の要求でなければならぬ。

生物的生命の要求と云ふものもそれ自身の爲でなく精神的生命の爲めではなくてはならない。本來「生の爲めの學」でなくてはならないと云ふことは、前述せし如く、「學」が文化的精神的生命の一面として全體の文化的精神的生命より制約せらるべきだからである。故に「生の爲めの學」と云ふ「生」は當然精神的生命全體でなければならぬ。かくて眞の經濟學の根柢たる精神は精神的生命全體の要求であるべきである。かくてこれを根柢とする經濟學そのものも、精神的生命の物質的手段を問題とすることによつて、それ自身高き價値を有することとなるのである。

またこの精神が精神的生命であると云ふことはそれが生物的生命であること、は反對にこれを根柢とする經濟學に客觀的妥當性を與ふることとなる。即ち精神的生命には Akt (行爲) に於てもまた Erlebnis (體驗) に於ても超個人的な *existenz* Gesetzmäßigkeit (精神法則性) が働き超個人的對象に關するものであり、従つて生物的生命とは全く異り、其本質上普遍的妥當性をもつものだからである。<sup>1)</sup>

即ち生物的生命そのもの、爲に經濟生活を考へるのは快樂主義の立場であり、この立場に於ては經濟生活に客觀性を與へ得ない。例へば、食物と云ふものでも食慾其ものを満足させる爲とし

1) spratger, Lebensformen, I Abschnitt 2. 及び 5.

ては、各人の要求は質的量的に様々な相違があり一致して考へ難いであろう。これに反して經濟生活を精神的な生活そのもの、手段として考へる人格主義の立場に於ては、これに一定の客觀性を與へ得る、例へば學問を爲すに足る食事と云ふ時は其要求は質的量的に略一定するものを考へることが出來よう。

次に、眞の經濟學の根柢たる精神的生命の要求は、單に個人や或階級のものでなく、社會、全員の精神的生命の要求であるべきである。

個人や又は或階級の要求を根柢とする經濟學は十分なる普遍妥當性を要求することは出來ない。只だ社會全員の要求を根柢とする時にのみ、その經濟學は十分なる其普遍的妥當性を要求することが出來るのであり、また同時に高き價值を有し得ることとなるのである。

かくの如くにして、眞の經濟學の根柢たるべき精神は、社會、全員の精神的生命の要求であるべきである。私が公益的精神と云ふのは即これである。かゝる要求を以つて經濟學の根柢となしたる時、その經濟學の全體系は初めて十分なる普遍的妥當性と高き價值を有し得ることとなるのである。これ經濟學の理想であり、於茲經濟學は初めて眞の「經國濟民」の學となるのである。

茲に附言すべきは、今日の經濟學に於ては、この社會の範圍は一國民社會を中心として考へられてゐるが、それが擴大し人類社會全體を包括し得るに至ることが最後の理想なることである。即ち、人類社會全體の經濟力が一體として考察され、其支配が人類社會全體の最大なる文化的成

長の爲めに考慮せらるゝに至ることが最後の理想である。

扱て進んで上述の公益的精神と經濟學及經濟學者の理想との關係を考へて見よう。

本論文の冒頭に於て述べたるが如く、一經濟學の根柢をなす精神は、其學全體の動力因でありまた目的因であつて其全體を貫く生命である。従つて其學全體の性質を決定すべきところのものである。故にこの根柢をなす精神が公益的精神と云ふそれ自身價值高く且普遍妥當性を有するものなる時、これを根柢とする經濟學そのものがまた同様の性質を帯び最價值高きものとなる譯であることは明になつたと思ふが、尙ほ幾分この點を布敷して見よう。

即ちこのことは、さきに、スミスの經濟學等につき、學史的にも實證した如く、其學の根本精神なるものは、其學者が經濟現象に對する全體的態度を決し従つてこの現象に對して提出する全體的問題——それはスミス及びマルクスに於ては著書の題目として現はれた——を決すべきところのものであり、従つてまたその問題の下に起るべき、原論的、歴史的、政策的、の問題の性質を決定すべきところのものである。更にまたこれ等問題を研究すべき學的方法、其根柢となるべき哲學の確立、資料の蒐集、其資料と其方法による其等問題自體の研究、等の根源的なる原動力を成すところのものである。かくて其研究全體の價值を決定すべきものである。

其根本精神にして、價值下くまた妥當性を缺くものなる時は、其學者が同一の經濟現象につき提出する問題自身すでに價值なく、従つてこの問題を處理すべき資料方法、其根柢をなす哲學も價值なく、また力強き研究力も出ることとは出来ない、かくて其研究全體は價值なきものとなり終

るであらう。

そしてこゝに「學者としての學者」と「所謂職業的學者」の相違を生ずることとなる。自己の學問の根柢に公益的精神が確立している「學者」としての學者」にとつては、自己の研究全體は自己の生命の發展であり、人類愛のほどばしりである。これを妨げんとするものあらば死をも賭して進むのである。スミスやマルクスに於て人道的勇士の意氣を見るは全くこれが爲であると思ふ。

之に反し其學の根柢に公益的精神の確立していない人は屢々「所謂職業的の學者」となる。これ其人の學の根柢には人類愛の強き流れがないので、彼にとつては其研究は屢々自發的自律的のものでなくなり、従つて學問的研究自體に満足することが出来なくなる。この時彼は他律的とならざるを得ない。即ち職業としてこれを爲すに至るのである。

乍然他律的職業的であると云ふこと、學者であると云ふことは兩立し得るであらうか。學者の職分が眞理を鮮明するにあると云ふことは何人も異存あるまい。然し自然科学者と異なつて社會科學ごとに經濟學を、經濟的なる公益獨占の支配している今日の社會に於て研究するものにとつては、其眞理と信ずるところを述べると否とにより、恰も、獨占の非難者と贊成者とに對して其獨占者階級即ち其社會の有力なる人々から來るべき結果についてスミスが述べたと同様に、全く相反する應酬が屢々來るのである。この際「學者としての學者」は眞理を表明し得るであらうが、「所謂職業的の學者」はこれと反對の態度を取ることが當然あり得るのである。然る時それが即ち、曲學阿世である。こゝに於て彼は既に學者では有り得ない。他律的意義に於ける職業と

云ふこと、經濟學者と云ふことはかくて、兩立し難いことである。

否此よりも更に根本的決定的なことは、これ等「所謂職業的の學者」はかく自己の信する眞理を表明し能はぬのみならず、更に眞理自體が見えなくなると云ふことである。即ち社會科學に於ける深い眞理は、全人格的要求をもつて求めて止まざる人へのみ與へられるのである。こゝに社會科學的認識と人格の方との密接なる關係があるのである。ディルタイはこのことを次の如くに云ひ表らはしている。

“Das auffassende Vermögen, welches in den Geisteswissenschaften wirken, ist der ganze Mensch; grosse Leistung in ihnen gehen nicht von der blossen Stärke der Intelligenz aus, sondern von einer Mächtigkeit des persönlichen Lebens……und mit dem Auffassen ist für sie (die geistige Tätigkeit) praktische Tendenz in Beurteilung, Ideal, Regel verbunden.”<sup>1)</sup> (精神諸科學の中に働く理解力は全人である。精神諸科學に於ける大なる功績は單に力強き智性より來るものではなく、人格的生命の偉大さより來るのである。……かくる精神的働きにあつては、價值判斷、理想及び制規に於ける實際的傾向が、理解と云ふことに結ばれているのである。)

即ち、自然科學に於けると精神科學又は社會科學に於けるとは認識能力自體の本質が異なつているのである、彼に於ては智性かも知れぬが、此に於ては智情意の働きであり der ganze Mensch (全人) である。故に單に所謂「頭がよい」と云ふことでは駄目であつて、die Mächtigkeit des persönlichen Lebens (人格的生命の偉大さ) を要するのである。ヘーゲル以後の大歴史家として歴史的社會的實在とこれに關する科學に深き親しみを有し、同時に天才的の哲學者である彼の此言

1) Dichey; Einleitung in Geisteswissenschaft. S. 38.

は、我等の深く味はざる可らざるごころのものである。

かくて、眞に人道的又は公益的精神の自覺あるものにして、即ち人類愛を有するものにして初めて、眞に大なる經濟學者となり得るのである。かゝる人に於ては其人格は全社會化され全人類化されてゐるのである、従つて其認識も全社會化され全人類化されるのである。經濟學に眞に志さんとする者は、先づこの學者の理想の根本に向つて努力精進しなければならぬ。

\*

\*

\*

以上私は、勝れたる經濟學及び經濟學者の根柢には、徹底せる公益的精神の存すること、並に存せざる可らざることを論じたのである。今このことより、今日の學界を顧みて今日經濟學者として立たんとするもの、用意を考へてこの論を結ぼうと思ふ。

スミスが十八世紀に出で、マルクスが十九世紀に出でて、共に徹底せる公益的精神より、その歴史的事實に應じたる勝れたる經濟學を生み出した如く、二十世紀の今日に於て、眞に經濟學者たらんと願ふもの、根本的なる務は、先づ經濟學に傳統的なる、この公益的精神を徹底的に自覺し以てこの精神を二十世紀の今日の歴史的事實に應じて發現せんことである。

そして、この爲には最早や十八世紀のスミスをもまた十九世紀のマルクスをも無批判に受け入れ、このことは我等に許されない。恰もマルクスがスミスを尊敬しながらこれを批判し、その正しきを受け入れて新なる歴史的事實の下に新なる經濟學を生み出せしが如く、今日の我々は、今日の學界に相對峙して論争の中心をなせるスミス、マルクスの二大學派其他を、十分に研究批判して

以て此を新なる時代の文化史的及哲學的意識に於て aufheben することに努力せねばならぬ。

今日の學界に於て立場の争と云ふことが甚しい様であるが、既に經濟學の根本的精神たる公益的精神を自覺して立つた以上、それ等の人々の目的は同一なのである。各人の立場又は學派の相違は目的の相違ではなく手段の相違たるに過ぎぬ。同一の窮局の目的を達せんことを眞に願ふものはまた眞劍に慎重にその手段を互に各方面より攻究しなければならぬ。斯くて同一の目的を達する爲めの手段について異説のあると云ふことは、悲しむべきことではなくて、反つて喜ぶべきことである。此等の人々は相寄り批判的研究をなすことにより大いに利益せらるべきである。

然るに、事實、我々は我國の學界に於て今日、最も忌むべき二つの非學者的態度を見る。それは自己の立場に對する無反省なる固執と他の立場に對する無研究無理解なる嫌惡とである。而してこの非學問的態度より我經濟學界を救ひ出し得べき最後の力も亦經濟學者としてのこの公益的精神の自覺である。

實に公益的精神のみは何れの時何れの處たるを問はず經濟學者の根本的精神たる可ものである。  
明德譬如「類眞珠」。圓明寂淨。都無差別相。以體明故。對物時能現一切色相。色自冇差別。而珠無變易。」(大正一五・二・二五)

附記。公益精神自體は學の根柢に潜在する意志であり感情である。この情意は經濟の人生に對する意義の事實に關する體驗を前提としてゐる。この事實を學的に反省すれば經濟の人生に對する意義の事實論となり、この事實論より經濟的理想の規範が出ることもなる。嘗て私が本誌に掲げた「人格主義の立場に於ける「經濟と人生」の論は、今より見れば意に満たさぬところはあるが、これなのである。公益的精神そのものを理論的に規定せんとせばこの經濟的理想を實現せんとする意志と云ふことになることは本論に於て論じたところからも推し得るであらう。これ等のことは他日改めて詳論したいと思ふ。

1) 今北洪川著、神海一瀾ヨリ。  
2) 本誌第十卷第六號及び第十一卷第四號